2005（平成17）年6月

AICHI UNIVERSITY LIBRARY COMMUNICATIONS 2005. 6

韋編（いへん）

愛知大学図書館報

No. 31

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

図書館は待っている

図書館長　玉　置　光　司

この度、思いがけなく図書館長を拝命したが、私には時代の趨勢を見極め、大所高所から図書館のありようを論ずる能力は乏しい。よって、私の使命は、私自身の経験に基づいて、読書の必要性、重要性をアピールして学生諸君に広く図書館を利用していただくよう呼びかけることにあると考えている。

頭を使うより体を動かすことが好きだった私は、中学生の頃、自分の経験した実感を疑いようのないものと信じていた（思い込みの激しい人間であったとも言える）。藤村操の厳頭之感の一節を“大いなる主観は大いなる客観に一致する”＊と誤って覚え、若いのによくここまで言うなと呆れながらも自分と同じメンタリティが気に入っていた。そんなとき、大学の哲学科を卒業した新任教師が、授業中脱線してプラトンのイデア論「君たちが目にしているものは実在するか？」を話し始めた。寝惚けているならいざ知らず、覚醒時の自分の目を疑うとは何事かと訝ったが、それにしても2400年間にわたり、こんな疑問に哲学者が魅かれてきたことには、それなりの理由があるかも知れない。もしそうであれば、私も自分の実感を無条件に信じることは問題かもしれないと不安になった。

しかし、それでは、この世で一体何を信じればよいのか？　こんな疑問が、私の哲学あるいは読書へのきっかけとなった。大学に入って、すぐに『小林秀雄全集』（新潮社）を買った。小林は難解な文章で知られた人だが、人生の達人のイメージがあり、何とも格好が良かった。小林は若い頃から本を読みまくっている。私も本を読まないことには始まらないと思い、空いた時間をよく図書館で過ごした。しかし、私は漕艇部に入っていて、1年の4分の1は合宿所で寝泊りしてボートの練習に明け暮れていたので、気楽に本だけ読んでいるわけにもいかなかった。1週間に1冊のペースで読んでも1年で約50冊、この先50年生きたとしても3000冊は読めない。人生はあまりにも短い。膨大な蔵書を持つ図書館でそんな感傷に耽ったことを記憶している。

こんな感傷を吹き飛ばすような猛烈な読書家がいる。立花隆である。氏の本『ぼくはこんな本を読んできた』、『ぼくが読んだ面白い本・ダメな本そしてぼくの大量読書術・驚異の速読術』（共に文藝春秋社）を学生諸君に薦めたい。自身を知的欲求がやたらに激しい異常知識欲求者という氏の読書量は凄まじい。例えば、氏が“脳死”について半

年ほど「中央公論」に連載したとき、準備のため買ってきて読んだ医学書は積み重ねて3メートルから4メートルになるという。氏はその間同時並行的に他の仕事もこなしている。その1つが、年間約6万3千点刊行される新刊書の中から面白い本を見つけ出して、週刊誌の「私の読書日記」欄で紹介する仕事である。このために目を通す本の量がまた凄い。立花の2冊の本は速読の薦めでもある。速読の極意は集中力のようだが、具体的なノウハウが散りばめられていて興味深い。

世界で最も完備した大学院制度を誇る米国大学院で要求される読書量も半端でないようだ。ブラウン大学大学院で文系の博士号を取得した吉原真里は『アメリカの大学院で成功する方法』（中公新書）の中で、毎回の授業に課されるリーディングの量が猛烈で、1週間に4冊の割合で研究書あるいはそれに相応する書物を読まされたと書いている。いかにしてこの困難をのりこえたか、この本は大学院生活の具体的アドヴァイスに満ちていて、これから海外留学を考えている人だけでなく、本学大学院に学ぶ人にも参考になるだろう。

立花も断っているが、速読が不可能な分野も多い。速読は特定の分野のパースペクテブを、限られた時間で理解するための最強のスキルであるが、研究者は速読だけでは話にならない。京大教授の西村和雄は『経済数学早わかり』（日本評論社）のあとがきで、恩師McKenzie教授の言葉「本や論文を“知っている”あるいは“読んだ”というのは、その内容の本質や重要な証明のポイントが頭にイメージ豊かに残っている場合にのみ使う言葉である」を紹介し、精読のなんたるかを述べている。学問に王道なしである。私個人の若い頃の経験でいえば、確率論の世界的名著Fellerの“An Introduction to Probability Theory and Its Applications, Vol. II” (John Wiley & Sons) を教員仲間で読んだことがある。毎週金曜日、授業終了後にコーヒーをすすりながら2時間ほど議論したが、5年間で300ページも進まなかった。群盲象を撫ずといった読書会であったが、理系の本格的な本はきちんと読むのにそれくらいの時間がかかるものである。

最近、村上春樹の『海辺のカフカ』（新潮文庫）が読まれているという。主人公カフカ少年は世界で最もタフな15歳を目指す猛烈な知識欲求者として描かれている。森の小屋で本を読む場面は次のように描写される「歴史書を読み、科学書を読み、民俗学や神話学や社会学や心理学の本を読み、シェイクスピアを読む。1冊の本を最初から最後まで読みとおすよりは、重要だと思える部分を、理解できるまで何度もていねいに読みかえすことをこころがける。そういうふうに読んでいると、様々な種類の知識が次から次へと、僕の中に吸いこまれていくたしかな手ごたえのようなものがある」。彼の読書はこの世を行きぬくために、自分自身のロードマップを作る作業としての濫読である。

今まで、本と無縁であった人も一度図書館に足を運び、カフカ少年のような読み方を試みてはどうか。最も大事な青春時代、バイトだけで貴重な時間を使い果たすのは余りにも惜しい。厳しい時代をタフに生き抜くための最善の方法は、自由な時間がある今、図書館の本を片っ端から開いてみることだ。きっと何かを見つけるだろう。図書館は君たちを待っている。

（経営学部教授）

（脚注）

＊ 正しくは“大いなる悲観は大いなる楽観に一致する”である。

中国で最初の博覧会　南洋勧業会について

鍾　少　華

前言

南京に遊び、秦淮河を巡る。わたしはとうに廃れてしまった勧業のルートをどうしても知りたくて、20世紀初葉に中国で最初に開催された博覧会（南洋勧業会）の遺跡を訪ねた。そして80余年前の史料と対照して、本文を執筆した。

南洋勧業会の由来

展覧会は世界で昔からあるが、近代的意味での展覧会（Exhibitionあるいは博覧会、勧業会）は1756年英国のロンドンにて始まり、その後各国に広まった。一世紀半の後、西洋で展覧会のない国はなく、それが開かれない年はなかった。日本においてさえ、いろんな名前の展覧会が毎年盛んに開催されていた。展覧会は実業競争のひとつの重要な手段となり、民族、地域の全面的な発展を促す機能を有していて、地域の近代化の程度を知り、比較評定するに格好の窓口ともなっていた。劉楨麟は「中国の商務を興すべく展覧会の開催を論ずる」という文章において、中国が展覧会を開くと利点となる8つを挙げている。――友情の交り、物産の拡張、人材の奨励、経済事情の調査、貿易の拡大、関税の増加、商業地の興隆、長年の習慣の廃棄。

こうして中国で最初の博覧会、南洋勧業会がついに開幕する頃には、当時の新世代の知識人たちに好意をもって迎えられた。彼らは積極的に計画、実行に参加し、研究、企画をすすめ、多くの研究報告を発表したのである。

光緒三十四年［1908年］十一月十四日、両江総督の端方と江蘇巡撫の陳啓泰が「江寧省城［現南京］に南洋第一回勧業会の開催を計画し、官商が合資して、気風を開き、農業・工業を奨励すること」を奏請した。その文中には欧米の農業・工業・商業の発展が、競技の盛んなる奨励によってもたらされたことが紹介されている。しかも勧業会は日本でさえ、すでに20回ほど開催されている。こうして、最初の勧業会が江寧で開かれることとなった。開催の原則は、一、趣旨は純粋とする、一、規模は小さく、一、体制を尊ぶ、一、褒賞は十分にする、一、準備は速やかにする、との五つであった。

この報告に朱筆がいれられ批准された後、端方はすぐに陳蘭薫を坐弁に任じ準備を急いだ。まず、江寧、上海のそれぞれに南洋勧業会の事務所と董事会［理事会］を設け、計画にしたがい進行を三段階に分けた。一、各項規約を協議し、建築設計図を描く。二、会場を企画し、国内各地の物産を調査する。三、建築を完成させ、展示品を集める。事務所は、日本の展覧会開催の規則を参照に、規約を制定する一方、両江が管轄する各府に対し、域内の農産、工芸、美術、教育の各分野の物品を探し集め、その地において定期的に展覧会を開催するため、展示品の準備をするよう命令を発した。また一方、他の各省や重要な開港場にたいし、出品協会の設立を求める書状をおくっている。各地の関道や勧業道を監督とし、漁業・牧畜業の物産、機械、図書、および各項目で製造された新奇な物品を収集し、展示品と勧業の基礎を組織するよう指示している。この他には、各省の名士、学界、商業界の開明的で事情に通じた人たちと連合して協賛会を組織し、交通を企画し展覧会への出品を補助した。その後、協賛会は勧業道孫多森を責任者とした。

勧業会の規約では次のように定められている。資金の供出については、総額50万元とし、それを10万株に分け、一株5元とする。官側が半分を出資し、残りを民間が引

き受け、農工商部の有限公司規約にもとづいて処理をすること。もし会の閉幕後、利益がのこった場合は株に応じて等しく分配し、損失があった場合は官側の株から補填をすること。会場地は南京城の北極閣より北、紫竹林より南を区画とし、広さは約700畝［約466,690㎡］、会終了後は評価額で売却する。会長は南洋大臣が担う（準備時は端方、開会時は張人駿）。副会長は官側三、民間二の5人で、他に董事が12人。輸送した各地の展示品は政府の承認を得て一律無税とした。

勧業会が正式に開催されていた期間は、宣統二年［1910年］四月から九月までである。会場の周囲は約7里、場内の建物には29棟の展示館があり、その内専門館が12館、華僑展示品館が1館、外国展示品館が2館、その他各省館、勧工場、博山ガラス館、記念塔（中にエレベータあり）、緑筠花圃、嬉笑奇観処など。会場内には軽便鉄道を巡らせ4つの駅がもうけられている。各館の飾りは華麗で堂々としていて、内部の展示品は数十万点はあり、そのそれぞれに統一したラベルが掛けられている。ラベルの表には、物品、品名、数量、価値、産地、製造者氏名、物産地が明記されていて、裏には効用、毎年の産出額、毎年の販売額、運送・販売の地方などが記されている。入場券は一枚2角で、値段が高いためか、記者の調べによると、展覧会期間中、一日の平均入場者数は300から400人で、半年間で7万人ほどにすぎなかった。

逸品揃いの工業展示品

下関で汽車に乗り、寧省鉄道沿線の丁家橋にて下車すると、南洋勧業会の正門に着く。牌楼を過ぎ、大門をくぐった西側に工芸館がある。工芸館の中ホールに模型が陳列されていて、前後のホールにはガラスの陳列棚に実物が展示されている。内容は、染織工業、採掘・冶金、陶器、土木建築、製造工業、化学工業の各部門。どれも逸品揃いのようであるが、まず製品を知るには比べてみることが一番である。たとえば、中国古代の手織り布の染色技術は世界トップといえるが、19世紀になると西洋の機械技術によって超えられてしまっていて、展示館にある多くの紡織品は、まさに手織りと機械の交代する時代を飾るものであった。当時、国内には織物工場が4000棟余で、労働者が20万人余いたが、その中の外国人経営の工場とごく一部の民営工場だけが、比較的良好な設備や管理によって、良質の製品を作っていた。

大部分の国産の製品は、品質は外国に劣らないが、紋様における、染色、配色、紋様の織りの面での科学的知識が欠けていたので、低価格だが顧客を引き付けるには不十分であった。同様に、帰綏工芸商局の各種の花絨毯、湖北勧工院手工善技場の各種の羊毛絨毯などが、似たような苦境にあった。

絹織物製品は昔から中国人の誇りなのだが、すべて手織りで大量生産ができない。19世紀末なってようやく日本の手拉鉄木合制［座操り法？］を導入し、小工場を建てそこで生産したが、欧米の市場はとうに日本に奪われていた。ある専門家は、湖北、南京、蘇州、杭州、鎮江などの各会社の展示品を比較研究し、杭州の織物技術は軽やかで精巧さを尊び、縦糸が少なく、模様は西洋に学んだ趣があり、華麗でとても巧み、色は明るく美しく誇るにたる、と認めている。ただ、外国の絹織物製品と比べてみるとどうであろうか。ある参加者は入場者の服飾に鋭く注目し、こう書いている。

《しかしながら、入場者の服装を仔細に眺めるなら、春から秋への変わり目には、外国の紗を着る者が2、3割、秋から冬への変わり目には、外国の緞子を着る者が3、4割、日本の繻子が1、2割である。女性たちが襟から出し入れする絹のハンカチが、みな非国産品であることも、驚くことではないだろう。》

これに対し、一部の有志が改良を提案した。それはたとえば絹織物製品の競技会、絹研究所の設立、染色競進会の設立、新しい織機の普及、染織学校の建設、留学生や商務調査団の派遣などである。

採鉱・冶金製品は国の重工業の象徴であり、また清末政府が実業の重点としたものであったが、展示品はよくなかった。光緒

末年には全国に銅採掘場は62箇所あったが、技術はまったく時代遅れで、工芸館では天然銅と黄銅鉱が見られるだけで、銅の精錬品はなかった。当時、銅さえすべて輸入に依存していて、10年間で輸入量は数倍も増加し、丁文江氏を感嘆させた――輸入の銅はますます増え、銅貨の鋳造もますます盛んなのは、わが国民にとって福ならず、と。

工業製品はじつは軽工業製品である。江西景徳鎮の磁器は肌理細かく滑らかで、絵柄も鮮やかで艶があり、彩色釉も精緻で美しく、ある一対の彩花帽筒などとても素晴らしいが、形式は昔のままである。湖南醴陵の磁業公司の製品は、形式が目新しく、絵も生き生きしているが、釉色に雅さがなく、地色が青みかかっている。聖人とかかわりのある磁器セットには、孔子の誕生から死去するまでの大小148点あり、醴陵磁器工業学堂の教師と学生が共同で生産したもので、大変面白い。湖北セメント製造工場は創意工夫を凝らし、展示館の庭の池に三孔のコンクリートの橋を建造し、橋の中ほどは丸木のあずまやをなし、あずまやの上には獅子や高い塔の模型があり、すべてがセメント製品で、橋の下は鉄道用の鉄筋コンクリートの枕木が数本使われているが、半ば鉄筋はむき出しであった、と説明書に書かれてある。化学製品については、有名無実といってよく、わずかに石鹸、蝋燭、ゴム糊があるのみであった。

機械分野の展示品は、機械館に陳列されているが、見劣りする僅かなものしかなかった。北洋勧業工場製造のマッチの切片機やボール盤、上海求新鉄工場の抽水機や搾油機、徳州製造局の無煙銃弾製造機、上海美華利の二つの大きな時報時計。武器は武備館と蘭錡館（江南製造局）に陳列されている。ただ、理由はわからないが、なんと40年前の鉄砲、子母砲、それに刀、弓、盾、軍服などが展示されていて、自ずと時代遅れがわかるのである。運通館の陳列品となるとさらにわびしく、たった数台の車と船の模型があるだけで、そこから当時の交通状況を理解することはできない。

農業館は千年農業大国の象徴

農業館は会場の中心ゾーンにあり、千年農業大国の象徴ということである。方形の大ホールの展示品は、農業、養蚕、茶、園芸、林業、水産、飲食、狩猟の八つにわかれている。

中国農産物の品種は、数千年の人工や自然による選択を経て、じつに多種多様で数え切れないほどであるが、『授時通考』に記載されている稲の種類だけでも、800種以上ある。20世紀の初め、中国は西洋といくつかの品種の交換をしていたので、農業館には、伝統的な優良品種もあれば、中国で試験的に栽培された多くの新しい西洋品種の成果もある。ある人が中国と西洋の農業や農民の特性を比較して、次のようなことを言っている。西洋の農民は科学に依拠しているので、農業分野の進歩が飛躍的であるが、中国は《農民が耐えてよく働くが、労賃は安く、不規則で、栽培の方法も古く、肥料を状態に応じて施すことを知らないし、輪作の方法も知らないので土壌がやせていく》と。

農業館に展示された産品や農業品種はとても多く、来館者の賞賛をえたものが多くあったが、批判的意見も多かった。たとえば展示した農作物では、芽がかび腐れしたものがとても多く、虫に喰われたものも多かった。いくつかの展示農作物はそろっていなくて、たとえば粟はあるが米がなかったり、穂の標本はあるが茎根のがないといったふうである。農作物の展示ラベルの表示には多くの漏れがあり、統一された基準がない。たとえば品名の総称、固有名、俗名、古名が混用され、南洋の果物になると音訳さえ使用されている。展示品の種子の選択は大雑把である。農作と関係する益虫や害虫の展示はとても少ない。農業の説明図版は少なく簡単なものである。水産物では製品がなく、新式の漁具もないなどである。

新式教育の成果の展示はしきりに議論をまねく

教育館は工芸館の向かいに立っていて、正門の東側である。千余年もの間、儒家規範の科挙制度が中国の人材の形成に深刻な影響を及ぼしてきた。勧業会が開催される5、6

年前、清政府はようやく科挙制の廃止を宣布し、六芸（古典）の試験に改め、あわせて西洋教育システムに依拠して中国の教育システムを改革した。当時、国内に約151万の小学生、4万の中学生、1万余の女学生、1万余の実業学生、数千名の大学生がいて、内外の新しい教師を大量に必要とし、教材、教育方法、教具を急いで大量に改変する必要があり、さらには徳育、知育、体育、美育といった分野から新しい学生を養成しなければならなかった。これはとても大きな任務である。教育館の展示品は、まさに新しい教育の成果と欠点を如実に示している。I字型の展覧大ホールには、小学、女学、中学、師範、実業高等、図書・祭器の六大部門に分けられ、展示品はガラスの棚に飾られている。

各レベルの学校の展示品は、教科書以外では、学生の学習と創作、たとえば手工、習字、図画、裁縫、刺繍、手工芸、機器、標本などである。図書・祭器部門の展示品の図書は、商務印書館、江蘇官書局、集成図書公司、国学保存会、文明書局の出版物を主とした。標本、機器は科学・祭器館が最多で、商務印書館の各種の印刷器具、及び中国図書公司の彩色石版も展示の中に並んでいる。

それらの教育成果は、見学者の評価の議論が一番多くあったものである。こうした議論は大方次の数項目に整理することができよう。一、疑わしい偽造品が多いこと。二、あるべき展示品の欠落が多いこと、たとえば、小学校の机、椅子、小学生の書画の成果、児童教育の遊具、小学校の教授管理の研究報告、小学校の主な理化器具と掛図、中学生および師範生の採集記録と実習レポートなど。三、あるべきでないのにどうしたわけか、教育に入れられた展示品。たとえば、小学生の書いた扁額、小学生の描いた日本風俗、日本女学校の堆絹屏風、米国勝家公司のミシン。四、展示品に粗悪なものが多い。五、教材の深刻な不足と大学の展示品がきわめて少ないこと。六、学生体育の紹介不足。七、展示品の学名表記が常に間違っていること。八、郷土教材の不足。九、西北地域の教育資料がきわめて少ないこと。

美術精品と外国実業産品の印象

美術館は小さな洋館1棟を占めていた。館内は工芸門、鋳塑門、手工門、彫刻門の四類に分かれている。中国の美術品は世界文明の宝庫の中の逸品揃いであるので、美術館は見学者の鑑賞の重要な場所となっていて、その中の多くの世に稀な逸品は、中華民族文明が永年積み重ねてきた成果である。

数多くの精品の中で、古物が大変注目をあつめた。乾隆景泰藍大宮動一対乾(3500両)、隆象牙涼席（1200両)、周窯磬、漢殿銅瓦、諸葛武侯銅鼓（2万両)、黄炳臣家蔵歴代銅銭34箱計1000余種、および明清各窯磁器など。

南洋勧業会を計画から開催までの全体の過程や影響を検分してみると、中国実業の振興の分野において、たしかに開拓的な仕事がなされていたことが分かるのである。各地の展示品の選択や展示を通じて、全国の実業界を大いに励ました。しかしながら、規模の大きさや深さの面からみると、その達成は非常に限られたものであった。

国民の文化水準を高める分野では実際の収穫もあった。事前の宣伝、展示品の選択、会場の見学、比較評価の研究を通じて、これまでになかった普及効果を確実に達成し、新しい思考を触発した。ただし、全国的にいえば、やはりはるかに不十分であって、見学者の少なさがそれを証明している。

この他に、会場内には暨南館（華僑の実業製品の紹介）と二つの参考館（独、米、英、日本の4カ国の公司による中国におけるダンピング製品の紹介）があり、それは中国の見学者に強烈なコントラストの印象を与え、国内外の実業における水準の格差を実感させた。当時のある校長が感慨を次のように書いている。

《この館（暨南館）に遊ぶと気色満面となるが、続いて参考館を巡るとわたしは驚愕で震えるのであった。その陳列品をよく見ると、良いものばかりで、実用に合わないものがまったくない。どれもわが国が目下必要としているものばかりである。これによって、外国人が平素から中国の嗜好を注意深

く調査していることがよく分かる。道理で、輸入品が日ましに増加し、止まることがないわけである。》

展示効果はよくないが研究と影響にみるべきものがある

とくに言及するに値することは、当時の人が勧業会開催期間においてなした研究である。宣統二年［1910年］五月二十一日、張謇らが「南洋勧業会研究会」を組織した。その目的は「同志を集め、南洋勧業会の展示品について、その技術の優劣や改良の方法を研究し、その進歩を導く。勧業の真の趣旨と合致し、展覧会の実効を吸収せん」ためである。蒋炳章が主席、李瑞清が会長、張謇が総幹事をなし、書記に孟森、幹事に黄炎培らが当たった。この研究会は半年間で一連の活動を進めた。一、多くの研究員を招き展示品の研究をし、研究報告103部を発刊した（後に『南洋勧業会研究報告書』を刊行）。二、学術会議を七回開催した。内容は農業、林業、教育（女子の纏足解放問題を含む）、などの分野で、報告者は馬相伯、袁梓青、柳詒征、沈恩孚、李白曾らであった。三、連絡、座談、意見書の受領など。四、全国農務連合会設立の準備。

研究会の各種の研究報告は、勧業会の成功を一致して評価しているが、同時に展覧会には多くの欠点のあることも指摘している。柳詒征は報告書の中で明確にこうのべている。「勧業会は、社会心理の実験室であり、出口（輸出）の類別を見れば、今日社会の人の思想がどうであるか分かるのである。」と。勧業会開催の意義と価値を見事に指摘している。勧業会には、展示品が少ないとか、準備期間が長すぎるとか、展示品は粗悪なのに費用は莫大であり、しかも展示品の多くにニセモノがあるといった数多くの弊害や欠点があった。しかし率直にいって、このような始まりによって、古い歴史の中国が近代化に向けて邁進すべく一歩を印しえたのである。

（翻訳：成田昭男・車道図書館職員）

＊　原文「中国第一次博覧会――南洋勧業会」『悠游録――鍾少華散文集』学苑出版社、2005
＊＊翻訳にあたって、つぎの文献を参考にした。
・吉田光邦『日本と中国――技術と近代化』三省堂書店、1989
・『中国早期博覧会資料匯編』第1巻、全国図書館文献縮微複制中心、2003

心ときめき

日々の暮らしの中で、胸の高ぶりやときめきを覚えることは、千年前の日本人も現代人と何ら変わらなかったようです。**「ときめく」**は、本来〈時＋めく〉からなる語で、時世に合致して声望を得ることを表す動詞でした。また**「ときめき」**は、「ときめく」から生じた名詞です。現代日本語の**「ときめき」**に相当する平安時代語は、『枕草子』の表現が如実に物語っているように、**「心ときめき」**と言えるでしょう。（文学部教授　和田明美）

『枕草子』
～「心ときめきするもの」～

雀の子飼（がい）…よき男の車とどめて案内（あない）し問はせたる…待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがするも、ふとおどろかる。

（日本古典文学大系29段）

私の「ときめき」　文学部1年　袴田梨紗

幼い少年の無邪気な笑顔
平和な毎日の始まりを告げる小鳥たちのさえずり
1Fと4Fで振動が伝わった糸電話
夢中になってボールを追いかけ、そして散る汗
青春を一緒に過ごした仲間と流す涙
いつも温かく迎えてくれるキャンパスの施設
新しい世界へと導く教授陣の講義
はちきれんばかりに収納された書庫の本

何げない毎日だけれど　その一瞬一瞬に
わたしのときめきがつまっている

本学教員出版物の紹介

愛知大学出版助成図書

『エネルギー社会経済論の視点』
大澤　正治　（経済学部教授）

はからずも、出版助成をいただく幸運に恵まれた。何気なく使っているエネルギーに関して、色々と視点を変えて考えてみた。

そもそも、エネルギーとは何か。エネルギーは姿も形も見えないが、何かを介してはっきりとわかる。そして、エネルギーがなければ生活できないという。

学生に、日頃、使っているエネルギーは何かと聞くと、蛍光灯という答えが返ってくる。すると、私は、蛍光灯を介して、エネルギーのしごとの恩恵を受けている、と説明する。私たちは、電力会社に電気料金も支払うが、蛍光灯も買わなければ、エネルギーの恩恵を授からない。このように考えると、エネルギーのために私たちが支払うのは光熱費だけではない当たり前のことが理解できるはずである。

話しを変えて、学生に暖房方法の選択を迫るのも愉快である。電気ストーブとガスストーブの比較もけっこう難しい。ある時、賢明な学生がいた。彼は、暖房が不必要となる夏、ストーブが役立つかを考えるという。その点では、電気炬燵が良いという。テーブルとして通年、使える。ストーブでは保管コストがかかると彼は指摘する。

このような話しは、経済学としてオーソドックスに考えることができる易しい応用であるが、どうも、世の中で考えているエネルギーの視野からは排除されている。

だれもが同意する現代的なエネルギーの常識は、化石エネルギーに代替するエネルギーをだれもが待ち望んでいるということである。確かに正しい考え方であるが、問題は、世界のエネルギー消費の9割も占める化石エネルギーからどのように撤退するかである。経済学としては、そのコストを考える。スクラップは、ビルドよりも大変なことである。スクラップしないでビルドするともっと大変なことになる。

色々と言っておきたいこと、世の中に問いてみたいことが多かったが、出版してから思い出したこと、思いついたこともたくさんある。さあ、次の機会のためにエネルギーのストックを始めよう。次回の題はもう決めている。『エネルギー社会経済論の失点』である。（著者）

エネルギーフォーラム　2005年3月　237頁　定価（本体1800円＋税）。

『アルベルトゥス・マグヌス　鉱物論』
沓掛　俊夫　（経済学部教授）

西欧ラテン世界において、盛期スコラ学の時代といわれる13世紀に、自然学の広範な分野についてアリストテレスのラテン語訳された著作の註釈やそれに基づく著述を行ったドミニコ会士のアルベルトゥス・マグヌス（Albertus Magnus; 1193?–1280）がいる。彼はトマス・アクィナスの師でもあり、アリストテレス主義スコラ哲学の創始者でもあるが、鉱物界にも関心が深く、『鉱物論 *Mineralium*』全5巻を著した。今回翻訳したラテ

ン語の原典は、Borgnetの編集したアルベルトゥス・マグヌスの全集（*Opera omnia*, 38 vols., Paris, 1890–1899）の中の第V巻に収められたものである。

アルベルトゥスは鉱物界を石・金属・中間物の3つに分類している。それらの産地、産状やさまざまな性質を記載し、その成因や護符や医薬としての効能などを論じている。石については、古代ギリシア以来の四元素（火、気、水、土）説で、質料（構成物質）や性質を説明しているが、金属についてはアラビア錬金術の硫黄―水銀説に基づいてそれらを解釈している。全部で約150種の鉱物（岩石・鉱物・鉱石・金属など）が記載されている。したがって、この書物は、古典古代（ギリシア・ローマ）時代とアラビアの鉱物に関する知識を集大成したものとも言えるが、アルベルトゥスが鉱山で観察したことや自身で行った錬金術の実験の結果をも加味して書かれているので、鉱物界について彼が独自に築き上げた体系でもある。

近代語とは違って、古典語の文献を翻訳することは相当の困難が伴うが、特に自然科学の分野の文献では、現在と当時とでは概念や用語が大きく異っており、適当な訳語を選ぶ（または造る）のに苦労した。ラテン語はカエサル（シーザー）の「来た、見た、勝った」ではないが、極めて簡潔に書かれているために、字面だけを訳してもほとんど意味が通じず、その背景をも汲み取って訳さなければならない。そのため、関連した事項についての幅広い知識が必要とされる。さらに、アリストテレスの質料と形相、可能態と現実態の哲学に基づいて解釈されているので、その方面の知識も必要とされた。（著者）

朝倉書店「科学史ライブラリー」の一冊　2004年12月　vii＋188頁　定価（本体3600円＋税）。

『茅盾研究 ―「新文学」の批評・メディア空間―』
桑島　由美子　（経済学部助教授）

「メディア」という言葉から今日イメージされるのはマス・カルチャー研究であったり表象文化論であったりするが、本稿は大衆文化・通俗文学とは対立概念である「新文学」（知識エリートの文学）と近代メディアとの連繋についての一試論であり、十年来の研究テーマである茅盾についての専著でもある。20世紀を代表するリアリズム作家・茅盾は90年代の文化批評において欧化・モダニティ・メディアなど様々な視点から議論される対象となって来ている。それは茅盾が、出版メディアとの関わりから「新文学」制度化の象徴的存在であり、国民国家統一を背景にして進められた『中国新文学大系』編纂をはじめ、創作理論・作家論・メディア批評においても時代の先蹤と位置付けられるためである。茅盾の伝記資料や近代出版関係の資料が出揃った今日、五四期に文化価値の転換をもたらし、20年代から40年代において「公共圏」を半ば独占した「新文学」と近代メディアとの連携について考察がなされても良い時期ではないだろうか。

以下各章の内容について触れると、第一章では商務印書館編訳所の文化史的背景と文学研究会同人の文学論・初期の評論、第二章では国民革命期のメディア（『民国日報』を中心として）、第三章では30年代の文芸誌・文化期刊と初期小説・『子夜』における物語コミュニケーションの多次元性、第四章では抗日戦期文化界と出版メディア（「生活書店」を中心として）をテーマとして取り上げている。未公開資料や現地調査の成果も併せ、同時代の文学研究多元化を受けての「重写文学史」や経典作家の再評価を取り込みつつ、90年代における茅盾研究の総括と新しい視点を提示した。

拙著の刊行は平成16年度愛知大学学術出版助成を受けてなされたものであり、心から感謝を申し上げたい。（著者）

汲古書院　2005年2月　viii＋328頁　定価（本体7500円＋税）。

図書館利用者座談会

豊橋図書館

去る5月18日、豊橋校舎の学生4名の方に集まっていただき、図書館に関して日頃思っていることを気軽に話してみてくださいと、座談会を催しました。率直な生の声を聞くことができ、今後の図書館を考えるうえで活かしていきたいと思います。

学生　OPAC（パソコン端末）が1階にしかないのですが、開架室2階や3階にもあるといいと思います。勉強している途中で下の階に降りるのは不便です。

館員　以前から、学生から要望がありました。現在、コピー機が2階に設置してあるように、検索端末も2階3階に設置するように検討いたしております。

学生　OPACの使い方は慣れればわかるのですが、初めの頃はよくわからないので手順がわかるようなものが端末ごとにあるといいです。

学生　カウンターの前の機械がどういうものなのかよくわからないのですが。どうしてそれが置かれるようになったのですか。

館員　自動貸出返却装置（ABC）といいます。もちろん従来どおりカウンターでの貸出返却もいたします。昨年10月の図書館システム変更に伴い導入いたしました。

学生　利用者はいるのですか。利用者が多くなるとカウンターの人はどうなるのですか。

館員　利用者はだんだん増えております。教員にも利用されています。ただ装置だけでは対応しきれないものもありますので、カウンターは必要です。また、カウンターはレファレンス（利用案内）に力を入れることができます。

学生　いつも閉まっている図書館東側（メディアゾーン側）を出入口として開けたら便利かなと思います。

館員　資料の帯出確認の問題があります。ひとつには非常口としての意味もあります。玄関に東側へ続く道を設けましたので、そちらを利用してください。

学生　入庫ガイダンスではパワーポイントでの説明ですが、ビデオで見せてもらうとわかりやすいと思うのですが。動きのあるほうが自分で書庫に入るとき探しやすい気がします。入庫実習なしでそのビデオを見るだけで書庫に入ることができればいいなと思います。

学生　座席数はどれぐらいあるのですか。

館員　約800です。

学生　座席数を増やしてほしい。試験期になると席が足りないように思います。その時期、自習室を開放しているのはいいと思います。

学生　話し合いをしながら勉強できる部屋があるといいです。今は手続きをしないと使えないようですが、申請しなくて普通に出入りできるといいです。

学生　ソファがあるといいと思います。アメリカに留学していたとき、ソファにゆったり座り、落ち着く静かな図書館がありました。そんなくつろげるスペースがあればと思います。

学生　雑誌の周りにもソファがあるといいなと思います。

学生　本や雑誌はどういうふうに選ばれているのでしょうか。
館員　学部学科構成に配慮し、出版情報誌、出版社目録等により選定しています。学生の皆さんを含め教員の研究あるいはさまざまな利用者に読んでほしいということを考えております。教員予算、学生予算、それぞれあります。学生からの図書購入希望も受け付けています。カウンターに申込書が備えてありますので遠慮なく希望を出してみてください。
学生　本屋にあるようなベストセラーがあるといいと思います。
館員　大学図書館という特性を考えて、内容によっては入れる場合もあります。
学生　活字離れが進んでいると言われますが、大学生が本を読むように、図書館としてこれはという本を薦めてもらうといいかなと思います。

学生　ビデオがあまり新しくないように思います。それに貸出のできないものがありますが。
館員　痛みの激しいビデオを補充しようとしても製作中止になっていたりして図書館としても困るのですが、媒体自体がビデオからDVDに変わってきています。ビデオ・DVDは著作権の許諾のないものは貸出ができないことになっております。

学生　予約資料が届いたときにお知らせをカウンター前に掲示しているのはわかっているのですが、なかなか大学に行けないときもあるので、お知らせメールをしてほしい。
館員　現在はメールアドレスが登録されていれば自動連絡しています。

学生　長期貸出とはどういうことですか。
館員　通常、学生は貸出期限が2週間となっていますが、長い休みのときは休暇前、休暇中に貸出手続きをしますと、返却日を統一して休暇明けに設定します。春・夏休み前には掲示および図書館のホームページでお知らせをしております。

学生　貸出を延長したいとき、図書館に直接来ないとだめですよね。
館員　現在は、本をカウンターに持参していただくか、自動貸出返却装置（ABC）にて貸出延長を行う方法が可能です。ご希望のWeb上からの延長手続きは、新図書館システム内でできるようになります。認証の方法や新サービスの提供については、確認でき次第広報いたしますので暫くお待ちください。

学生　社会人や留学生には今の館内案内図ではわかりにくいのではないでしょうか。
館員　カウンターでは口頭での説明もいたします。ただ今豊橋校舎では英語版と中国語版の『りようあんない』を製作中です。まもなく目にすることができますので、もう少しお待ちください。

学生　館内の温度調節は自動ですか。4月からなんだか暑いのですが。
館員　基本的には自動になっていますが、設定は変更できます。6月から冷房が入る予定です。場所によって温度差がでることは理解してください。

館員　本日はどうもありがとうございました。

［出席者］

稲垣　智子（文学部）
馬場　武宣（国際コミュニケーション学部）
高寺　志歩（国際コミュニケーション学部）
渡辺　有美（国際コミュニケーション学部）
図書館員　2名

蓬　左　文　庫

文学部教授　沢　井　耐　三

日本の古典文学を専攻する者にとって、古い書物を所蔵する各地の文庫・図書館は重宝この上もない、ありがたい存在である。

卒業論文に、「連歌」という、そのころ作品がほとんど活字化されていない分野をテーマに選んだことから、大学4年生の春ごろから、あちこちの図書館に出かけて、貴重な本を見せてもらった。

しかし、ぶっつけ本番で、古い写本や版本に接しても、悲しいかな、その文字がよく読めない。鉛筆を置き、腕組みをして、文字面と睨めっこ、という場合がしばしばあり、結局は読みきれずに、鉛筆でなぞり書きして帰り、『五体字類』などで調べる一方、教授のところへ持ち込んで判読してもらうことも少なくなかった。

夏休みには、連歌の本が多くある京大図書館、大阪天満宮、天理図書館を訪れ、時間と競争で筆写に励んだが、大阪天満宮では昼時になって雨が降り出し、外出できないときに、手作りのお昼をご馳走になったということもあったし、また、旅費節約のため、天理大学の学生寮に宿泊をお願いしたときには、あの柔道部のOBの若い舎監さんが自室に泊めてくださり、あれこれ随分親切にしてくださった。訪書旅行に関しては、楽しかったこと、困惑したこと等々、思い出は尽きない。

大学院生になってからは、尊経閣文庫、静嘉堂文庫、国立国会図書館、東洋文庫、内閣文庫など、近場の文庫へしばしば足を運んだが、昭和48年、愛知大学に赴任してからは、早速、西尾市の岩瀬文庫、刈谷市の村上文庫、豊橋市の羽田野文庫、橋良文庫、新城市の牧野文庫などを訪れた。その中で、久曾神昇先生のご紹介を得、私設の穂久邇（ほのくに）文庫の貴重書を拝見・利用させてもらったことは、この上ない幸せであった。

名古屋で、貴重な古典籍をたくさん所蔵する所といえば、旧尾張藩主徳川家の蔵書を伝える蓬左文庫であろう。「蓬左」は熱田の左（北）を意味する語で名古屋を指す。場所は徳川美術館の隣り。愛知大学車道校舎の前の、車道通りをそのまま北上して、突き当たったところが蓬左文庫である。工事のためしばらく休館していたが、平成16年11月新装なり、一般公開された。名古屋市の所管であるので、閲覧のための紹介状などは要らない。

蔵書には、徳川家康から譲られた“駿河御譲本”を中心に約十一万冊、日本・中国・朝鮮の貴重な書籍や尾張関係の史料を有し、文学・歴史のみならず、宗教・政治・地理・医学などひろい分野を網羅している。

文庫を訪れる前に、蓬左文庫のホーム・ページを見ておくこと。そしてPC検索、あるいは『名古屋市蓬左文庫国書分類目録』（同様に漢籍、古文書古地図、尾崎久弥旧蔵本などの目録がある）で、見せてもらう書物を調べておくことが望ましい。

時間に余裕があれば、徳川美術館の尤品を鑑賞するのも楽しいだろう（こちらは有料。愛大生は無料。下の※参照）。

所　　在：名古屋市東区徳川町1001（徳川園内）
電　　話：052-935-2173
開館時間：閲覧室［閉架図書］　9：30～12：00
　　13：00～17：00
　　［開架図書］　9：30～17：00
　　：展示室　10：00～17：00
交　　通：市バス・名鉄バス徳川園新出来下車徒歩5分
　　JR中央線大曽根下車南口より徒歩10分
※愛知大学は「徳川美術館大学メンバーシップ」に加入しており学生は学生証を提示、専任教職員は身分証明書等を提示すれば、無料入館できます。

編集・発行　愛知大学図書館　2005年6月20日発行　No. 31

■豊橋図書館　〒441-8522　豊橋市町畑町字町畑1－1　☎(0532) 47－4181
■名古屋図書館　〒470-0296　西加茂郡三好町黒笹370　☎(0561) 36－1115
■車道図書館　〒461-8641　名古屋市東区筒井二丁目10－31　☎(052) 937－8116
URL　http://library.aichi-u.ac.jp